【主題】第１学年 入門期における平仮名指導

【副題】スモールステップ復習プリントと「ぬりえ」を活用した「運筆力育成」の実践

【学校・団体名】仙台市立大和小学校
【役職名・氏名】　教諭　千葉　敏行

１ 研究の背景と課題

（１）入門期平仮名指導の難しさと児童の実態

小学校第１学年における入門期平仮名指導は、就学前の保育形態や家庭環境に起因する「文字経験の格差」により、指導上の困難を極める。入学前の協力要請に関わらず児童の習熟度には著しい個人差が存在し、文字未習得による学習への抵抗感を示す層と、既習ゆえに意欲低下や集中欠如を呈する層に二分される。

実態として、前者は執筆姿勢や鉛筆の保持法、筆圧の弱さに加え、枡目内の空間認識能力に課題を抱える。後者は一見書字が可能に見えるものの、「大体の形を知っている」段階に留まり、初めの「曲がり」や「結び」等の巧緻性が未発達な時期には書字への苦手意識が生じやすい。さらに学校生活に適応し始める６月頃には、不適切な筆順や止め・はね・はらいといった「自己流の癖」が定着し、正確な字形を失念する傾向が顕著となる。

したがって、単なる読み書きの結果のみに依拠するのではなく、姿勢や運筆といった共通の学習基盤を整えつつ、発達段階と二極化した実態の双方に応じる指導体系の構築が不可欠である。

（２）ICT 化の進展と手書き能力・運筆力の低下

近年、GIGA スクール構想の推進に伴い、低学年段階から一人一台の ICT 端末が導入されている。タブレット操作による視覚的情報の理解や直感的な操作が容易になる一方で、鉛筆を正しい姿勢と持ち方で握り、適切な筆圧で紙に文字を書くという「手書き機会」の減少が懸念されている。筆圧が弱く「線がふにゃふにゃしている」「文字が薄くて読みにくい」といった課題は、文字の安定性のみならず、学習全体の集中力や持続力の低下にも直結している。

（３）研究の狙い

これらの課題を踏まえ、本研究では入門期における手書きの基盤となる「運筆力（筆圧・指先と手首の巧緻性）」の育成に着目した。文字を直接書き直させる指導に終始するのではなく、児童の負担感を減らしながら楽しんで指先を育てる「ぬりえ」の実践、粗大運動から微細運動へとスムーズに移行させる「空書き」、視覚的に動くイメージを与えるキャラクターの活用、並びに家庭と密接に連動した「スモールステップ復習プリント」を統合した指導カリキュラムを構築・検証した。

２ 研究の目標と仮説

（１）研究目標

ア 身体運動（粗大運動）と視覚イメージを組み合わせた指導を通じ、平仮名の筆順および運筆の基本動作（止める・はねる・払う・曲がる）を定着させる。

イ 指先・手首の調整力および筆圧を高める「ぬりえ」と「復習プリント」を日常的に取り入れ、確かな運筆力と美しい字形を身に付けさせる。

ウ 授業と家庭学習の連動および負担感の少ない段階的アプローチにより、書字に対する意欲と自己肯定感を高める。

（２）指導の仮説

発達段階に応じた「ぬりえ」や「空書き」等の運筆指導を先行・連動させ、さらに思考力や定着度に応じたスモールステップの復習プリントを家庭学習と一体化して実施すれば、児童は身体感覚として運筆力を獲得し、苦手意識を持つことなく自発的に正しく美しい平仮名を定着させることができるだろう。

３ 研究の実践内容と手立て

（１）身体運動から文字へつなぐ「空書き」と「姿勢指導」

入門期の児童にとって、手元の小さな紙の上に鉛筆で繊細な文字を書く「微細運動」は負荷が大きい。そのため、腕全体や肩・背筋を使う「粗大運動」から段

階的に手元へと感覚を落とし込んでいくアプローチを採用した。

ア 「空書き」の系統的実践

教員と向かい合った状態での鏡文字（児童から見て正しく見える向き）による実演を基本とし、立ち上がって身体全体で空間に文字を描く活動を行った。

（ア）動きのイメージ化：「象の鼻のように大きく動かす」「滑り台を『すうっ』と滑る」「手裏剣を『しゅっ』と飛ばす」といった児童に身近な身体表現や効果音を取り入れた。

（イ）一斉確認とリズム化：全員で声を掛け合いながらリズミカルにそら書きを行うことで、教員は児童全員の筆順や動作の軌跡を一目で見渡し、その場で全体指導や個別の軌道修正を行った。

イ 姿勢の合言葉

毎時間の書く活動の直前、全員で姿勢の合言葉を確認・実践した。

（ア）あしは ぺったん：両足をしっかり床につけ、下半身を安定させる。

（イ）せなかは ぴん：腰骨を立て、背筋を伸ばす。

（ウ）おなかと せなかに ぐう ひとつ：お腹と背中に拳1つ分の空間を開ける。

（エ）かみを おさえて さあ かこう：反対の手でしっかりと紙を押さえる。

この一連の動作を習慣化させることで、正しい筆圧と運筆を可能にする身体的土台とした。

【身体運動から実書への指導ステップ】

［ステップ1］立って大きく「空書き」（粗大運動・動きのイメージ化）

［ステップ2］「指書き（なぞり書き）」（紙の上で手ざわりと筆脈を体感）

［ステップ3］「鉛筆での実書」（微細運動への移行・筆圧コントロール）

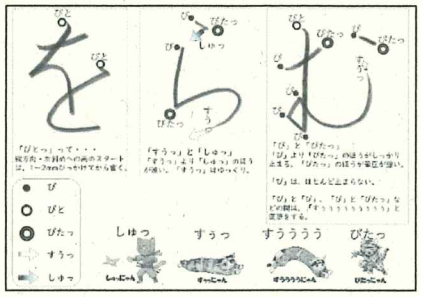
（2）運筆の理解を高めるキャラクターの実践

平仮名特有の書き方のコツ（止め・はね・払い）を直感的に理解させるため、運筆キャラクターを設定し、授業および学習掲示・プリントに展開した。

ア 「ぴたにゃん」：「ぴたっ」と確実に止まる動きを担当（忍者が着地するポーズ）。

イ 「すうっにゃん」：「すうっ」と力を抜きながら伸ばす・払う動きを担当（滑り台を滑るポーズ）。

ウ 「しゅっにゃん」：「しゅっ」と素早く力強くはねる動きを担当（手裏剣を投げるポーズ）。



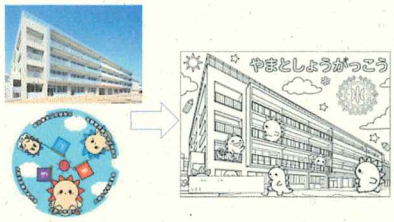
これらのキャラクターは、児童になじみのある猫のイラスト素材をもとに、生成AI（Gemini）にプロンプト（指示文）を与えて「忍者の衣装を着せ、運筆のポーズをとらせる」形で独自にアレンジ・作成した。黒板での掲示や練習ノートのヘッダー、プリントのポイント解説枠に配置することで、児童は「ここは『ぴたにゃん』だから止まるんだね」と、言語指示以上に素早く運筆の要点を捉えることができた。

（3）生成AI（Gemini）を活用したオリジナル「ぬりえ」による運筆力育成

直接的な文字の修正指示（「もっときれいに書き直しなさい」等）は、入門期の児童に強い抵抗感と挫折感を与える。そこで、文字指導の前段階および補強として「ぬりえ」を活用した。

ア 教材作成における生成AI（Gemini）の活用

児童の興味・関心を高めるため、地域や学校生活、季節の行事に関連するオリジナルのモノクロぬりえを作成・提供した。ぬりえに対して抵抗があると思われる男子児童の意欲喚起に努めた。



（ア） 学校や身近な風景、人物などの写真・イラストデータを準備する。

（イ） 生成AI（Gemini）に対して「小学校一年生でも取り組むことができる、太い枠線のシンプルなモノクロぬりえを作成してください」等のプロンプトを入力する。

（ウ） 出力された画像を精査し、塗り絵プリントや宿題用平仮名練習用紙の余白・裏面にレイアウトして印刷・配布する。

児童は自分たちに直接関係のあるオリジナルイラストに強い関心を示し、意欲的に取り組む姿が見られた。

イ ぬりえが運筆力にもたらす教育的効用

枠内を丁寧に塗る作業は、文字指導において以下の明確な機能を果たした。

（ア）　**筆圧の調整と持続力の獲得**：「濃く塗る部分」と「薄く塗る部分」を意識させることで、鉛筆にかける力加減（筆圧調整）を体得させた。また、一定時間指先の緊張を保つことで、長時間の執筆に耐えうる筋力が養われた。

（イ）**「止め・曲がり」のブレーキ感覚**：枠線からはみ出さないように塗るコントロール力は、文字の「止め」や「曲がり・折れ」に必要なブレーキ感覚へ直接還元された。

（イ）　**心理的負荷の軽減とスモールステップ**：色鉛筆・鉛筆の指定を設けず、「完璧に塗らなくても、半分塗れば十分すごい」という指導方針をとることで、苦手意識を持たせずに達成感を味わわせた。

（4）授業と家庭学習を連動させた「スモールステップ復習プリント」

学校での指導と家庭での定着（宿題）をシームレスにつなぐため、独自のスモールステップ復習プリントを開発した。指導の意図を正確に具現化するため、手本文字はすべて自作（手書き筆耕）して教材を作成した。

ア 段階的な難易度設定

（ア）　**初期段階**：太いガイドライン上のなぞり書き。運筆キャラクターのアイコンを添え、止め・はねの意識を促す。

（イ）　**中期段階**：運筆トレーニングのあと、鉛筆でのなぞり書きによって、字形に対する意識を高める。

（ウ）　**発展段階**：手本を見て全体のバランス（四角い枡目のどこに配置するか）を自分で考えて書く形式。途中には「お手本の続きを考える」といった思考力を要する小問題を配置。

イ 家庭学習との連動

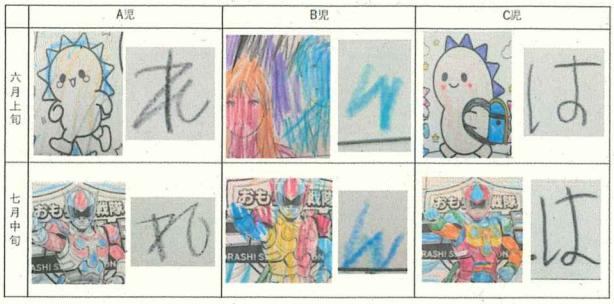
学校の書写・国語の時間に扱った文字と同一のフォーマットをその日の宿題プリントとして配布。裏面や下部には前述の「ぬりえ」を配置し、「平仮名練習が終わったらぬりえを楽しめる」構造とすることで、家庭学習の習慣化と定着を図った。

4 考察と実践の成果

本実践を通じ、第1学年児童の運筆力、字形の定着、並びに学習に向かう態度において以下の明確な成果と変容が見られた。

（1）運筆力（筆圧・巧緻性）の向上

4月当初、2Bの鉛筆を用いても筆圧が弱く線が薄い上に、紙の上で滑ってしまうような弱々しい書字傾向を示す児童が全体の約半数を占めていた。こうした実態に対し、個に応じた手立てを講じた結果、児童に顕著な変容が見られた。



A児は、落ち着いて学習に取り組むことができなかったが、自分にとって新鮮なぬりえ活動に目を輝かせて取り組んだ。姿勢は乱れているが、一心不乱に取り組む姿が見られた。鏡文字がほぼなくなり、字形も整ってきた。

書字活動に不慣れであったB児は、当初、鉛筆を握りしめるように保持し、運筆の方向も一方向に限定されていた。しかし、ぬりえ活動に継続して取り組む中で、色鉛筆を多様な方向へコントロールして動かせるようになり、筆圧の調整力も身に付いてきた。その結果、「ん」の終筆の「払い」を正確に表現できるようになるなど、筆圧の変化と巧緻性の高まりが確認された。

一方、書字活動自体には慣れているものの運筆が極めて緩慢であったC児は、単に手本をなぞるだけの運筆から、勢いと迷いのない筆勢のある書きぶりへと成長を遂げた。特に難易度の高い「横むすび」の字形を意識したコントロールが可能となり、運筆の確実性が増した。

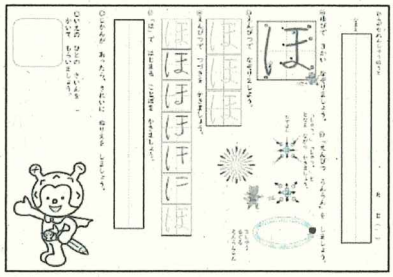
このように、日常的な「ぬりえ」の実践と「空書き」の徹底を通じ、手首を正しく固定しながら指先で力加減をコントロールできる児童が大幅に増加した。

（2）視覚と動作の協応による字形ポイントの定着

「ぴたにゃん」「すうっにゃん」「しゅっにゃん」という直感的なキャラクターと、「象の鼻」「手裏剣」などの身体表現を介した指導は、児童の頭の中に明確な動的イメージを形作った。

従来、単に「ここははねます」「ここは止めます」と口頭で指導した際に見られた「止めを無視して流し書きする」「すべての線を力任せに書く」といった失敗が

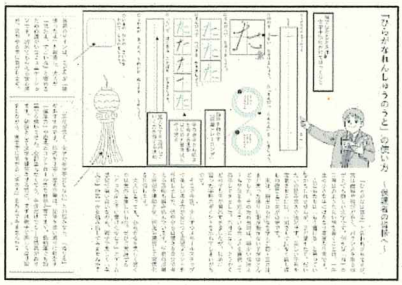
激減した。児童自身が「ここは『ぴたにゃん』の場所だ」と呟きながら手元をコントロールする自発的な調整行動が観察された。



（3）家庭学習の習慣化と書くことへの自己肯定感

「復習プリント」と「ぬりえ」を融合させた宿題構成により、家庭学習における保護者からの負担感の訴えが解消された。「文字の書き直しをさせると子どもが泣いて嫌がる」という初期の相談に対し、ぬりえを介したスモールステップのアプローチを保護者へ説明・共有したことで、家庭でも「ぬりえが上手になったね」「力がしっかり入るようになったね」といったプロセスを承認する声掛けが増加した。

結果として、自分の文字や書字学習に対する苦手意識が薄れ、「きれいに書けた」「自分で考えてバランスよく書けた」という達成感が育まれ、学級全体に落ち着いて学習に取り組む土壌が醸成された。



5 成果と今後の課題

（1）成果のまとめ

ア 身体運動とイメージを介した指導の有効性：「空書き」による粗大運動からのアプローチと「運筆キャラクター」の活用により、児童が運動感覚として平仮名の基本動作を定着させることができた。

イ 「ぬりえ」を介した運筆力の定着：生成 AI を活用した魅力的なオリジナルのぬりえを通じ、直接的な書き直しのストレスを与えることなく、筆圧と指先の巧緻性を高めることができた。

ウ 学校と家庭の連動システム構築：スモールステップ復習プリントとぬりえの組み合わせにより、家庭学習がスムーズに習慣化し、児童の自己肯定感を高める書字指導のモデルを提示できた。

（2）今後の課題と展望

ア カタカナ・漢字指導への接続：第1学年後半に展開される「カタカナ」および「漢字」の学習において、今回構築した運筆力とキャラクターイメージ（直線的な動き・折れ等の対応）をどのように拡張・発展させていくかの検証が必要である。

イ 他教科・日常の書字への汎用化：書写や国語の時間で培った正しい姿勢や適切な筆圧が、算数の数字や連絡帳の記述など、日常生活全般にどれだけ持続・波及しているかを長期的に追跡・評価していくことが求められる。

6 おわりに

小学校 1 年生という学校教育のスタートラインにおいて、「正しい姿勢で、自分の手と指先を思い通りに動かし、心を込めて文字を書く」という体験を積み重ねることは、将来にわたる学習の基盤となる。

デジタル端末が広く普及した現代社会であるからこそ、手書きという身体的運動が持つ「思考の深まり」「運動野の刺激」「記憶の定着」という価値は一層高まっている。生成AIをはじめとする最新のデジタル技術を「教材作成の省力化・魅力化」のために活用しつつ、児童に還元する教育活動においては身体的感覚やアナログな「手描き・手書き」の温もりを尊重する―この「デジタルと手書きの調和」が、入門期の児童に無理のない真の学びと「書く楽しさ」をもたらす鍵であると考えている。今後も一人ひとりの発達に寄与する丁寧な実践を継続していきたい。

7 参考文献

(ア) 教師用指導書(2024)『小学校書写学習指導書1年』(光村図書)

(イ) 陰山英男・藤井浩治(2026)『1年生のかん字運筆ドリル』(小学館)

(ウ) 酒井邦嘉(2024)「デジタル脳クライシス――ＡＩ時代をどう生きるか」(朝日新書)

(エ) 文部科学省（2023）『GIGA スクール構想下における学びの保障と手書き・ICT の適正な組合せに関する調査報告書』

(オ) アンデシュ・ハンセン(久山葉子/訳)（2020）『スマホ脳』(新潮新書)

(カ) 川島隆太(2018)『スマホが学力を破壊する』(集英社)